

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2010

課題番号：18520350

研究課題名（和文） 古代語出来文の格体制に関する基礎的研究

研究課題名（英文） A Research on Case-System of Emergence Sentences in Classical Japanese

研究代表者

川村 大 (KAWAMURA FUTOSHI)

東京外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：50234133

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：文法 古代語 出来文 ラレル形 受身 自発 可能 尊敬

1. 研究計画の概要

本研究は、古代語動詞のル・ラル（ユ・ラユ）下接形（ラレル形）および動詞ミュ・キコユ・オボユなどを述語とする文（出来文）の格体制を資料に即して調査し、その実態を明らかにすることを目指す。具体的には下記のとおり。

(1) 『源氏物語』に用いられている出来文の全例について次の点を調査する。

- ・ 述語動詞の種類（ル・ラル下接形の場合）
- ・ 動作主項目の表示法
- ・ 出来文述語に対応するル・ラル非下接形などを述語とする文（対応する文）の格体制と、出来文で主語になり得る名詞項目の格

(2) 調査結果をデータベース化する。

2. 研究の進捗状況

調査には下記のテキストを使用した。

長瀬真理ほか(1990) 「日本語－英語対照『源氏物語』のテキスト・データベース」(東京女子大学情報処理センター) 所収『源氏物語』ファイル(底本：日本古典文学全集(小学館))

ただし、句点と鍵括弧(「」)ごとに改行するよう加工した上で検索した。加工・検索には佐野洋(2003)『WindowsPCによる日本語研究法——Perl, CLT00Lによるテキストデータ処理——』(共立出版)付録のCLT00Lを用いた。

(1) 出来文用例の収集・データ化

① 出来文(全例)の用例を抽出し、述語動

詞の種類・動作主項目の表示法などを調査、データベース化した。

データは、該当する例文のほか、巻名(桐壺・帯木 等)、「日本古典文学全集」におけるページ数、述語動詞の終止形、用法名(受身・自発・可能・尊敬)、動作主項とその格表示、対象項とその格表示、などのデータを1件として構成される。

② 出来文に用いられる動詞のル・ラル(等)非下接形を述語とする文(「対応する文」)のうち、主要なものの用例抽出・データ化を行った。現在、いわゆる「自動詞の受身」を構成する動詞を集中的に調査し、「越ゆ」「騒ぐ」「笑ふ」「たなびく」「吹く」などについて調査を遂げている。

(2) 古代日本語・日本語文法等関連文献の収集

(1)の作業に際し、古代日本語や日本語文法・他言語の文法に関する近時の知見を得るため、古代日本語・日本語文法・他言語の文法に関する図書・雑誌や関連する雑誌論文(動詞、ヴォイスに関するもの)を収集した。

3. 現在までの達成度

③ やや遅れている。

(理由)

出来文の用例の収集は終了し、付帯情報の入力や書式の統一は完遂していないものの、実用に耐えるだけの加工は施し終えた。しかし、「対応する文」の用例収集が、まだ一部動詞の用例収集に留まっている。研究代表者自身が作業のための時間をあまりとれなかったこと、また、古代語テキストを問題なく扱える補助員の確保が困難であったことな

どがその要因として考えられる。

4. 今後の研究の推進方策

「対応する文」の用例収集について、いくつかの主要な動詞に集中して行うよう方針を変更する。すなわち、古代語出来文研究上の論点になる文（間接受身文、いわゆる「非情の受身文」など）に用いられる動詞を選んで調査する。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2件）

川村大「『見ゆ』『聞こゆ』『思ほゆ・思ゆ』の格体制—動詞ラレル形との対照の観点から—」『東京外国語大学論集』77号 pp.370-351 2008（査読無し）

川村大「古代日本語における受身表現」『語学研究所論集』14号 pp.97-111 2009（査読無し）

〔学会発表〕（計 0件）

〔図書〕（計 0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0件）

○取得状況（計 0件）

〔その他〕

川村大「動詞ラレル形とその周辺」日本語学会夏期講座講義（日本語文法論B（中上級））（2008年8月9日～24日）